

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370527

研究課題名(和文)現代日本語における格体制の交替現象の諸タイプに関する研究：成立原理の統一的説明

研究課題名(英文)A unified account of the syntactic alternation phenomena in modern Japanese

研究代表者

川野 靖子 (KAWANO, Yasuko)

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：00364159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本語には、従来から知られている壁塗り代換(例：壁にペンキを塗る/壁をペンキで塗る)をはじめとして、格体制の交替現象が複数存在する。本研究では、これらの現象の成立原理について、以下のことを明らかにした。(1)これらの交替は、いずれも、「同じ現実の出来事が依存的転位と総体変化の二通りに類型化される」という共通の原理によって成立する。(2)交替のタイプの異なりは、それぞれの交替を起こす動詞が表す依存的転位の種類や総体変化の種類を反映したものである。(3)上記(1)(2)が示すように、格体制の交替現象は、動詞の範疇的意味に階層を考慮することで、統一的に説明することができる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to provide a unified account of the syntactic alternation phenomena in modern Japanese, such as "kabe-ni penki-o nuru / kabe-o penki-de nuru (the locative alternation)." The conclusions are summarized as follows: (1) All these alternations arise as a result of a semantic type shift, in which the same objective event is linguistically conceptualized either as a change of location in which the manner of existence of the located entity is defined by the other entity, or as a change of state in which the external appearance of an entity changes through association with another entity while the attributes of the entity itself remain unchanged. (2) The types of the alternation are determined by the lower-level semantic types of the alternating verbs. (3) As (1) and (2) show, syntactic alternation phenomena can be explained in a unified way by assuming a hierarchy of verbs' semantic types and focusing on the lower-level semantic types.

研究分野：日本語学

キーワード：格体制の交替 壁塗り代換 場所格交替 動詞 位置変化 状態変化

1. 研究開始当初の背景

格体制の交替現象とは、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」のように、同じ動詞(この場合は「塗る」)が、複数の格体制(この場合は～ニ～ヲと～ヲ～デ)をとり、しかも、その2文がよく似た意味を表すという現象である。興味深いことに、英語等の他言語でも、似たような動詞が同じ現象を起こすことが報告されている(e.g., smear paint on the wall/smear the wall with paint)。つまりこの現象の背後には、かなりの程度普遍的な成立原理があると考えられるのである。

従来の研究では、格体制の交替現象の中でも、主に、「壁塗り代換」と呼ばれる交替について研究がなされてきた。しかし、筆者が過去の研究で明らかにしてきたように、現代日本語には、壁塗り代換以外にも格体制の交替現象が存在する(川野 1997・2002・2006・2009等)。壁塗り代換以外の交替の研究は従来手薄であり、したがって、全タイプの交替を視野に、その成立原理を統一的に説明しようという試みは未だなされていない。

2. 研究の目的

上記「1.」で述べた背景を踏まえ、本研究では、現代日本語における格体制の交替現象の全タイプを対象に、その成立原理を統一的に説明することを目指す。より具体的には、次の2点を明らかにする。

- ・格体制の交替現象の諸タイプに共通する成立原理とは、どのようなものか。
- ・交替のタイプの違いは、どのような仕組みで生じるのか。

これにより、現代日本語における格体制の交替現象の研究を、一部の交替の個別的な分析の段階から、現象全体の統一的な説明の段階へと前進させることを目指す。

3. 研究の方法

筆者は川野(2009)において、「動詞の範疇的意味に階層を考え、下位の意味階層において交替動詞と非交替動詞の違いを抽出する」というアプローチを提案し、壁塗り代換の成立原理を説明した。このアプローチを他のタイプの交替にも適用して、それぞれの交替の成立原理を明らかにする。その上で、交替間で何が共通し何が異なるのかを明らかにする。

また、格体制の交替現象を、類似の特徴を持つ他の文法現象(ヴォイス等)と比較し、その違いを原理的なレベルで明らかにすることによって、格体制の交替現象の成立原理の特徴をより明確にする。

4. 研究成果

(1) 離脱型の壁塗り代換の成立原理

離脱型の壁塗り代換とは、次のような～カラ～ヲ形と～ヲ形との交替現象(自動詞の場合は～カラ～ガ形と～ガ形の交替)を指す。

テーブルから皿を片付ける
テーブルを片付ける

グラスから水を空ける
グラスを空ける

このような離脱型の交替が成立する原理について、以下のことを明らかにした。

「テーブルを片付ける」等の～ヲ形の表現は、名詞「テーブル」のメトニミーによって成立するのではなく、動詞「片付ける」が状態変化動詞としての用法を持つために成立するのだと考えられる。「テーブルから皿を片付ける」「テーブルを片付ける」は、位置変化と状態変化の類型交替として(すなわち、壁塗り代換として)位置づけられる。

離脱型の壁塗り代換を起こすのは、位置変化動詞の中でも依存的転位を表す動詞であり、状態変化動詞の中でも総体変化を表す動詞である(非依存的転位や自体変化を表す動詞は交替を起こさない)。

この条件は、川野(2009)で記述した、付着・移入型の壁塗り代換(「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」等)を起こす動詞の条件と共通するものであり、交替の型を問わず、壁塗り代換を起こす動詞の条件として一般化できる。また、「付着・移入型」、「離脱型」の別を問わず、壁塗り代換は、「現実世界の同じ出来事が、言語の表す意味の世界において、依存的転位と総体変化の二通りに類型化されることで成立する現象」として位置づけられる。

(2) 満ち欠け代換の成立原理

「満ち欠け代換」とは、次のような～ニ～ガ形と～ガ～ニ形の交替現象を指す。

彼に積極性が欠けるコト
彼が積極性に欠けるコト

選手達に自信が満ちているコト
選手達が自信に満ちているコト

このような「満ち欠け代換」の成立原理について、次のことを明らかにした。

「欠ける」「満ちる」等が～ニ～ガ形で表す存在・非存在や位置変化には、ガ格句の事物の存在のあり方が二格句の事物の観点から規定されるという特徴がある(これに対し、「ある」「入る」等の、非交替述語が表す存在・非存在や位置変化には、このような特徴がない)。つまり、「欠ける」「満ちる」等が表す「ガ格句の事物(x)の存在のあり方」には、二格句の事物(y)が組み込まれている。これにより、これらの述語

の表す「xの存在・非存在(あるいは位置変化)」という事態を、yに関する事態として(yの状態や状態変化として)読み替えることが可能になる。

また、「欠ける」「満ちる」等が～ガ～二形で表す状態や状態変化には、ガ格句の事物と二格句の事物とで構成される総体的な状態であるという特徴がある(これに対し、「優れている」「ふくらむ」等の、非交替述語が表す状態や状態変化には、このような特徴がない)。つまり、「欠ける」「満ちる」等が表す「ガ格句の事物(y)の状態」には、二格句の事物(x)が組み込まれている。これにより、これらの述語の表す「yの状態(あるいは状態変化)」という事態を、xに関する事態として(xの存在・非存在や位置変化として)読み替えることが可能になる。

「満ち欠け代換」は、こうした、事態類型の読み替え(「存在・非存在」と「状態」の読み替えや、「位置変化」と「状態変化」の読み替え)によって起こると考えられ、この点で、壁塗り代換の成立原理と共通する。

「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」は、上記のような共通点を有する一方で、「満ち欠け代換」の～ガ～二形(e.g., 選手達が自信に満ちているコト)の二格句が、ガ格句の事物の内在物であるのに対し、「壁塗り代換」の～ガ～デ形(e.g., グラスが水で満ちる)のデ格句は、ガ格句の事物に内在する物ではないという相違点を持つ。

「満ちる」は、「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の両方を成立させるが、これは、これらの述語が～ニ～ガ形で表す「位置変化」に、ガ格句の事物が二格句の事物の内在物である場合(「選手達に自信が満ちる」のように、二格句の事物からガ格句の事物が発生する場合)と、内在物でない場合(「グラスに水が満ちる」のように、他の場所から既存物が移動してくる場合)の2通りが考えられるためである。これに対し、「欠ける」が～ニ～ガ形(e.g., 彼に積極性が欠けるコト)で表す「存在・非存在」では、ガ格句の事物が二格句の事物の内在物であることが語彙的に指定されているため、「満ち欠け代換」しか起こらない。

以上の「(1)離脱型壁塗り代換の成立原理」と「(2)満ち欠け代換の成立原理」及び、付着・移入型壁塗り代換と餅くるみ交替に関する川野(2006・2009)の内容を統合することにより、現代日本語における格体制の交替現象の成立原理を統一的に説明した。

(3)格体制の交替現象とヴォイス現象の違い
「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」のような格体制の交替現象と、「猫がネズミを追いかける(能動文)」「ネズミが猫に追い

かけられる(直接受動文)」のようなヴォイスの現象との原理的な違いについて、次のことを明らかにした。

「事態の同一性」の内実の相違

能動文と直接受動文は、同じ事柄の意味を表しつつ叙述事態の層において異なる意味内容を表すという関係にあり、この場合の「事態の同一性」は「事柄の意味としての事態が同一」であることを指している。これに対し、格体制の交替現象は、同じ現実の事態が二通りの事柄の意味に類型化される現象であり、この場合の「事態の同一性」は「現実の事態が同一」であることを指している。すなわち、格体制の交替現象とヴォイスの現象における「事態の同一性」は、その内実が根本的に異なる。

格形式の交替が起こる仕組みの相違

「能動文/直接受動文」では、話し手がどの事態参画者に視点を置いて述べるかによって、格形式が交替する(すなわち、叙述事態の層における意味内容の交替によって格形式の交替が起こる)。これに対し格体制の交替現象では、事態類型の交替(位置変化か状態変化か)と、それに伴う事態参画者の意味役割の交替によって格形式が交替する(すなわち、事柄の意味の層における意味内容の交替によって格形式の交替が起こる)。

述語動詞の語形変化の有無

「能動文/直接受動文」の場合と異なり、格体制の交替現象では、動詞が語形変化しない。このことは、「格体制の交替現象は同じ現実の事態が二通りの事柄の意味に類型化される現象である」という上記の議論と、「位置変化」や「状態変化」といった事態の類型が動詞の語形によって表示されることはない」という日本語の一般的なシステムから捉えられる。

以上のように、ヴォイスの現象との違いを原理的なレベルで明らかにしたことにより、格体制の交替現象の成立原理の特徴を明確にした。

(4)動詞「囲う」の分析

本研究の内容を補強するものとして、動詞「囲う」の分析を行った。

「囲う」という動詞は、総体変化を表すにもかかわらず、格体制の交替を起こさない。この点で、一見、交替動詞の条件に関する本研究の記述の反例のようにもみえる。しかし「囲う」の意味的特徴を丁寧に分析すると、反例ではなく、交替を起こさない理由が本研究の枠組みによって説明できることが分かる。

具体的に述べると、「(～ヲ～デ)囲う」には「ヲ格句の事物(内側) デ格句の事物

(外側)」という位置関係を指定する」という意味的特徴と、「「デ格句の事物 フ格句の事物」という動きの方向を指向する」という意味的特徴があり、これらの意味的特徴が、格体制の交替を妨げると考えられる。よって、格体制の交替現象を「位置変化の下位類である依存的転位と、状態変化の下位類である総体変化の間の意味タイプのシフトによって起こる現象」と捉える本研究の枠組みの中で、「困う」のふるまいも説明できることになる。

(5) 壁塗り代換が体系的な文法現象であることの確認

日本語に壁塗り代換は存在しない(従来壁塗り代換とされてきたものは体系的な文法現象ではない)と主張する山田(2004)を検討し、山田(2004)の挙げる根拠が、いずれも、壁塗り代換が文法現象であることを否定する根拠にはなっていないことを指摘した。その上で、壁塗り代換はやはり体系的な文法現象であるという見解を提示した。

壁塗り代換は、既に多くの研究で文法現象として研究されてきており、したがって、「壁塗り代換は体系的な文法現象である」という本研究の結論自体は新規性を持つものではない。しかし、本研究において、壁塗り代換がどのような点で文法現象であると言えるのかを改めて明示的に確認したことにより、格体制の交替現象の成立原理を追求することの意義を、より明確にすることができたと考えられる。

引用文献

- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点 いわゆる「壁塗り代換」を中心に」『筑波日本語研究』2、筑波大学芸・言語研究科日本語学研究室
- 川野靖子(2002)「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係 「N1 ガ N2 デ～」と「N1 ガ N2 ニ～」の違いを中心に」『日本語文法』2-1、日本語文法学会
- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象 格成分の対応の仕方」『日本語の研究』2-1、日本語学会
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞 交替の可否を決定する意味階層の存在」『日本語の研究』5-4、日本語学会
- 山田昌裕(2004)「壁塗り代換(spray paint hypallage) 文法現象の存在をめぐって」『表現研究』79、表現学会

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

川野靖子(2018)「「彼には積極性が欠けている」と「彼は積極性に欠けている」 「満ち

欠け代換」の成立原理」『埼玉大学紀要(教養学部)』53-2、pp.97-116、査読なし

川野靖子(2017)「格体制の交替の観点からみた「困う」の意味的特徴—壁塗り代換や餅くるみ交替を起こさない理由—」『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2 仁科弘之教授退職記念論文集 言語をめぐるX章』pp.128-141、査読なし

https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9205&item_no=1&page_id=26&block_id=52

川野靖子(2017)「「グラスから水を空ける」と「グラスを空ける」—離脱型壁塗り代換の分析—」『埼玉大学紀要(教養学部)』52-2、pp.121-134、査読なし

https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=16054&item_no=1&page_id=26&block_id=52

川野靖子(2016)「壁塗り代換は、なぜヴォイスのカテゴリーに入らないのか」『埼玉大学紀要(教養学部)』51-2、pp.81-93、査読なし

https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=16016&item_no=1&page_id=26&block_id=52

川野靖子(2016)「壁塗り代換は体系的な文法現象である—山田昌裕(2004)「壁塗り代換(spray paint hypallage)—文法現象の存在をめぐって—」への反論として—」『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊1 小出慶一教授退職記念論文集 ことばの本質を求めて』pp.26-43、査読なし

https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9202&item_no=1&page_id=26&block_id=52

〔学会発表〕(計3件)

川野靖子(2016)「離脱動詞における格体制の交替現象」第13回現代日本語文法研究会

川野靖子(2016)「文法現象としての壁塗り代換の特徴」第12回現代日本語文法研究会

川野靖子(2014)「壁塗り代換における「事態の同一性」について ヴォイスとの比較の観点から」第11回現代日本語文法研究会

6. 研究組織

(1)研究代表者

川野 靖子 (KAWANO, Yasuko)
埼玉大学・大学院人文社会科学研究科・
准教授
研究者番号：00364159